文芸

❖俳句

目をとじて今年をおもふ柚子湯かな　池田　逸子

時雨来る道の駅てふ蕎麦処　伊藤　敬子

十畳間自作の一句筆始め　伊藤　定男

福達磨片目のまつに年を越し　今関満喜子

冬落輝たった三センチの富士を見た　魚地　照子

府馬の冬千たび耐へたる楠の瘤　江森　悦子

七福神句友なつかし初詣　大木　素風

福引を当てんと息を吸い鎮め　大谷　武彦

潮沫や浜に二tの鏡餅　川島　孝夫

年賀状一枚毎に顔浮かび　桑名　大行

やれ打つなまつわりて来る冬の蝿　向後　寛

冬満月和讃流るる友の通夜　越川せつ子

年明くる変らぬ今朝の新しき　越川　福子

歳時記の扉を開きし年暮るる　小松　藤男

坂田池風飄々と鴨の群　佐瀬　輝夫

枯蟷螂太き緑の腹もてり　宍倉　道子

箱根路を襷で繋ぐ息白し　玉虫　栗扇

元日の日射しやわらか良き予感　土屋美枝子

極月や夕焼け富士の見ゆる道　戸村　靜華

福祈る人の多しや達磨市　長谷川正子

初詣で恙なき年祈りけり　早川　勇

初読みや光源氏の千鳥読み　山口　一秋

雲無くて藍と茜の初御空　山口　とし

時雨るるや船泊る夜の夢二の碑　渡部　和秋

❖短歌

帰省子にまじりつ我が家の庭先に
羽子板ふるうは齢忘れて　越川　義則

刈られたる土手に置く霜煌らかに
あらたまの年今し明けゆく　高梨　キヨ

新玉を寿ぎ迎へ祈るらむ
夫との歩み健やかなれと　安田　和子

美しき夕焼け空を眺めては
命ある身の幸を知る　鈴木　益郎

骨密度同年齢と比較して
一六九パーセント密かな誇り　青木　秀子

街なかの電飾された落葉樹
夜を眠らせぬ人の営み　佐瀬　初音

小春日の砂浜に遊ぶ母と子を
犬と連れ立ち吾は見てゐつ　西山満里子

年賀状に書き添ふ一言それぞれに
違ひのあれば遅々と進まず　吉岡　信子

亡き夫が好みし若松に百合を活け
正月迎ふも三年となりぬ　鈴木まさ子

あざやかな黄菊朝日に輝やきて
冬ざれの庭あたり明るし　池田　春江

軽トラの荷台に幌かけ行商の
鮮魚売りがくる霜の朝を　押尾　輝子

突風で倒れし老婆を気づかひて
車から降り青年駆け寄る　平山　芳子

三十年終に実らぬ銀杏を
今日はきっぱり伐りてしまへり　田崎　尚美

紅葉の峰の間よりくっきりと
霊気を放つ富士が聳ゆる　八角　三枝

満月に照らされ二番穂揺れてゐる
夜の広田に光散らして　芹川　初子

狭き家走り廻りて家事こなす
出社の前の掃除・洗濯　島田ますみ

卓上のシクラメンの鉢さ揺れつぐ
吾が書くペンの動きにつれて　斎藤つね子

こうほう博物館 vol.11

縄文のアクセサリー

長倉の東長山野遺跡からは、耳飾・ペンダント・腕輪など、縄文時代のアクセサリーが8点出土しています。耳飾は滑石と土製、ペンダントにはヒスイとコハク、腕輪はカキ貝殻で作られています。

滑石の耳飾4点は、扁平な半円か三角形で、一端に孔があり、孔の近くのふちが少しえぐれています。そのことからこの耳飾は元々イアリング状をした形で、けつ状耳飾と呼ばれるものです。この耳飾は縄文前期に流行し、そのときに作られたものが、縄文中期の東長山野遺跡まで、伝えられたものと考えられます。その間に耳飾は2つに割られて再加工され、ペンダントとして胸を飾るようになったのかもしれません。

ヒスイのペンダントは硬玉大珠とも呼ばれ、新潟県糸魚川で産出する硬い白緑色の宝石です。県内では同様のもので、長さ10cmになるものも出土していて、遠い新潟から多くのヒスイが入ってきたことがうかがわれます。

コハクのペンダントは不定形な形で、表面をほとんど加工していない石に、孔をあけただけのペンダントです。コハクは銚子市犬吠埼周辺でまれに産し、古墳時代にも棗玉としてよく使われました。写真の琥珀玉は、伏せた土器の下から出土したことから、副葬品と考えられます。

腕輪は分厚く大きいカキ貝殻で作られていて、作った当時は白くかつ真珠色に輝いていたことでしょう。

これら縄文のアクセサリーは、他の遺物から比べれば多くはありませんが、縄文人が自らを飾る美意識があったことを知る、大きな手がかりになります。